

古英語 *geteorian* とラテン語 *deficere* について

石 原 覚

I

以下は、古ラテン語訳 (*Vetus Latina*) のハバクク書 3 章からの引用である。¹⁾ この大地の荒廃の描写では、「衰弱する、滅びる」の意味を持つ動詞 *deficere* が用いられている。

- (1) *Quoniam ficus, . . . non adferet fructus, et non erunt natiuitates in uineis; mentietur opus oliuae, et campi non facient escam. Defecerunt ab esca oues, et non supersunt in praesepibus boues. (ITALA Hab. 3, 17 (Aug. civ. 18:32))*²⁾

(……なぜなら、いちじくの木は実を結ばず、ぶどうの木には実がなく、オリーブの実りは裏切り、畑は食物を作り出さぬであろう。羊は食物ゆえに滅び、牛は畜舎に残っていない。)

ハバクク書 3 章は、賛歌 (*canticum*) として金曜日 (*feria sexta*) に歌われたが、(1) の *deficere* は、次の (2) におけるごとく、古英語の詩篇行間注解 (*Psalter gloss*) のうちの一つに付属する賛歌において、同じく「衰弱する、滅びる」の意味を持つ動詞 *geteorian* により訳されている。

- (2) . . . *geteorodon fram mete scep & na beoð on binne oxan (PsCaD 6(5).16)*³⁾

T. Muraoka は、(1) の *deficere* がギリシャ語原文で対応する動詞 *ἐκλείπειν* を「(ある物の) 供給がなくなる」(*to run out of supply (of something)*) の意味で、また S. Connolly は、この問題箇所 *deficere* を「やせ衰える」(*pine away*) の意味で捉えている。

本稿では、これらの解釈に批判を加えた上で、(1) のギリシャ語原文における、羊についての記述と牛についての記述に見られる並行体の乱れが、古英語の行間注解にまで残されていることを明らかにしたい。

II

本章では、*geteorian* と *deficere* が基本的意味を共有し、しばしば前者が

後者の訳語となることを示す。

まず *geteorian* と *deficere* は、次の (3)(4) におけるごとく、有生物を主語として、「衰弱する」の意味を表すのに用いられる。

- (3) *Min Drihten Hælende Crist, me genihtsumiað þas tintrega, for þon ic eom geteorod.* (LS 1.1 (AndrewBright) 240)⁴⁾

(我が主、救い主キリストよ、こんな苦しみはもうたくさんです。私は疲れ果てました。)

- (4) *Hunc quoque, ubi aut morbo gravis aut iam senior annis deficit, abde domo,* (VERG. *georg.* 3, 96)⁵⁾

(このようなもの [駿馬] でも、病に苦しんだり、老齢で鈍くなったりで、衰えれば、家から遠ざけよ。)

よって、次の (5) におけるように、この意味の *deficere* が *geteorian* に訳されている例が見出される。(以下、古英語とラテン語の対応関係を例示する際には、このように古英語訳とラテン語原文を並べて引用する。)

- (5) *he gesyhð hi geuntrumod & ða belocen an geteorodun & ða lafa synd fornumene.* (Deut 32.36)⁶⁾

(彼は、彼らが弱まり、包囲された者たちが衰え、残りの者たちが消耗するのを見る。)

videbit . . . et clausi quoque defecerint residuique consumpti sint (Dt)⁷⁾

(……包囲された者たちもまた衰え、残りの者たちが消耗するのを見るであろう。)

次いで *deficere* は、以下の (6) におけるごとく、有生物を主語として「減びる、消え去る」の意味で用いられる。

- (6) *Progenies Caesarum in Nerone defecit.* (SVET. *Galba* 1)⁸⁾

(カエサル家の血族は、ネロで死に絶えた。)

下の (7) では、この意味の *deficere* が *geteorian* に訳されており、後者にも前者同様、「減びる、消え去る」の意味があることがわかる。

- (7) *and him gast weorðeð georne afyrred; swylce teonlice geteoriað, on heora agen dust æfter hweorfað.* (PPs 103.27)⁹⁾

(彼らからすっかり息吹が取り去られる。彼らはかくも悲惨に息絶え、そして自らの塵へと戻る。)

auferes spiritum eorum et deficient et in pulverem suum revertentur (Ps 103:29)

(あなたは彼らの息吹を取り去り、彼らは息絶え、自らの塵へと戻るであろう。)

また次の (8) に見られるように、*exterminari* (絶やされる) への注解として用いられることも、*geteorian* が「滅びる、消え去る」の意味を有することを示している。

- (8) *quoniam qui nequiter agunt exterminabuntur qui uero expectant Dominum ipsi hereditate possidebunt terram (PsRom 36:9)¹⁰⁾*

(不正をなす者たちは根絶やしにされ、まことに主を待ち受ける者たちは地を受け継ぐであろう。)

þe nearolice doþ beoð geteorode . . . (PsGID 36.9)

さらに *deficere* は、次の (9) におけるように、無生物を主語として、「欠乏する、尽きる」を意味する。

- (9) *Postremo cum litoribus arcerentur, aqua etiam praeter cetera necessaria usui deficiente Italiam reliquere. (LIV. 7, 26, 14)¹¹⁾*

(結局、海辺から離れていたため、他の生活必需品に加えて、水も欠乏したので、彼らはイタリアを放棄した。)

同じ意味を *geteorian* が持つことは、下の (10) で、「欠乏する、尽きる」の意味の *deficere* を *geteorian* が訳していることから認められる。

- (10) *& þa þæt win geteorude. þa cwæð þæs hælendes modor to him hi nabbað win; (Jn (WSCp) 2.3)¹²⁾*

(ぶどう酒が尽きたとき、救い主の母が彼に「彼らにはぶどう酒がありません」と言った。)

et deficiente vino . . . (Io)

(ぶどう酒が尽きたとき、……)

なお *deficere* は、次の (11) におけるように、この「欠乏する、尽きる」の意味で、非物質的な物を主語としても用いられる。

- (11) *neque deficiat umquam ex infinitis corporibus similium accessio, (CIC. nat. deor. 1, 105)¹³⁾*

(無数の原子からなる[神の]類似した像の到来は、絶えることがない。)

下の (12) で *geteorian* は、この用法の *deficere* を訳しているが、これは前者にも同じ用法があることを示すものである。

- (12) *Ic gebæd for þe þæt ðin geleafa ne geteorige; (Lk (WSCp) 22.32)*

(あなたの信仰が絶えないように、私はあなたのために祈った。)

... ut non *deficiat* fides tua (Lc)

(あなたの信仰が絶えないように、……)

III

ここで(1)のギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書(LXX)における対応箇所である次の(13)を見てみると、*deficere*は*ἐκλείπειν*に由来することがわかる。

(13) ... ἐξέλιπον ἀπὸ βρώσεως πρόβατα, καὶ οὐχ ὑπάρχουσιν βόες ἐπὶ φάτναις. (*Hb.* 3.17)¹⁴⁾

(……羊は食物ゆえに滅び、牛は飼い葉槽の傍らにいない。)

この*ἐκλείπειν*は、次の(14)におけるように、*deficere*と同じく、有生物を主語として「滅びる、消え去る」の意味で用いられる動詞である。

(14) καὶ ἐποίησαν ἑαυτοῖς χώνευμα ἐκ τοῦ ἀργυρίου αὐτῶν κατ' εἰκόνα εἰδώλων, ... αὐτοὶ λέγουσιν Θύσατε ἀνθρώπους, μόσχοι γὰρ ἐκλελοίπασιν. (*Ho.* 13.2)¹⁵⁾

(彼らは銀で偶像の姿に似せて自分たちのために像を造った。……彼らは言う、子牛が絶えたので、人間を犠牲にささげよ。)

ここで注目されるのは、T. Muraoka が(13)を、*ἐκλείπειν*の「(ある物の)供給がなくなる」(“*to run out of supply of sth (ἀπὸ τινος)*”)の例として挙げ、問題の部分(ἐξέλιπον ἀπὸ βρώσεως πρόβατα)を「羊には食物がなくなった」(“*sheep ran out of food*”)と解釈している¹⁶⁾ことである。この解釈は妥当なものであろうか。

Cyrrillus Alexandrinus (444没)¹⁷⁾は、(13)のこの部分について、次の解釈を記す。

ἐκλελοιπέναι μὲν ἀπὸ βρώσεως πρόβατα, τουτέστιν, ἀπὸ τοῦ βρωῶσιν οὐκ ἔχειν.¹⁸⁾

(羊は食物ゆえに、すなわち食物がないゆえに、滅びた。)

また Beda Venerabilis (735没)は、古ラテン語訳でこれに対応する部分(Defecerunt ab esca oues)について、以下のように述べる。

Deficient ab esca oues, quia quibus internae refectio dulcedinis abest, unde innocentia uitae simplicis proueniat non est. Sic autem dictum est: *Defecerunt ab esca oues*, id est quia esca deerat,¹⁹⁾

(羊は食物ゆえに減びる、なぜなら内なる優しさの回復を欠く者には、そこから素朴な生の無垢が生じるようなものを持たないからである。述べられているのはこういうことである——「羊は食物ゆえに」すなわち食物が欠けていたために「減びた」。)

これら2人の解釈に共通しているのは、問題箇所 *ἐκλείπειν*、*deficere* に伴う *ἀπό*、*ab* が、欠乏する物を示すためではなく、理由を示すために用いられているという考え方である。

さらに、問題箇所 *deficere* に伴う *ab* を理由を導くものと捉える見方は、次の *Verecundus* (552没) による解釈にも見出される。ただしここでは、先の *Cyrellus* および *Beda* のごとく「食物がないゆえに」と否定辞を補って解釈されておらず、文字通り「食物ゆえに」と捉えられている。

Non ait: Deficiet ab ouibus esca, . . . sed e contrario: Ipsae oues deficient ab esca, ut oues non sint et esca supersit,²⁰⁾

(……食物は羊からなくなるであろう、と言うのではなく、逆に——羊がいなくなり食物は残るように——羊そのものが食物ゆえに減びるであろう、と言う。)

なお、*deficere* が理由を表す *ab* を伴うという現象が、以下の (15) におけるごとく、聖書外にも見出されるという事実は、上記 *Beda* および *Verecundus* の見解を正当化するものである。

(15) *et in itinere deficiet ab eo, quod stercus retinere non potest, et per os salivas multas emittit et fatigatior fiet.* (CHIRON 431)²¹⁾

([内臓を病む役畜は] 糞便をこらえられず、口から大量のよだれを流し、疲労しきるため、歩行中に死ぬであろう。)

Muraoka は、前述の「(ある物の) 供給がなくなる」という *ἐκλείπειν* の語義の例に、(13) と並べて次の (16) を挙げる。*Muraoka* のここでの考えに従えば、*ἀπό* の後ろの *λαός* (民) が王国にとって欠乏する物を表すことになる。²²⁾

(16) *ἀλλ' ἡ κεφαλὴ Ἀραμ Δαμασκός, ἀλλ' ἔτι ἐξήκοντα καὶ πέντε ἐτῶν ἐκλείψει ἡ βασιλεία Εφραϊμ ἀπὸ λαοῦ,* (*Is.* 7.8)

(アラムの頭はダマスコであり、あと65年でエフライムの王国は滅び、民ではなくなるであろう。)

しかしながら *Cyrellus* は、以下の (16) の解釈において、原文を2度言い換える際、*ἀπό* 以下を切り捨て、*ἐκλείπειν* を独立用法で用いている。

Καὶ ἡ βασιλεία δὲ Ἐφραΐμ ἐκλείπει ἀπὸ λαοῦ ἔτι ἐξήκοντα καὶ πέντε ἐτῶν ἐκλείπει ἡ βασιλεία Ἐφραΐμ, τοῦτ' ἔστι, τοῦ Ἰσραήλ ἐκλείπει καὶ ἡ κεφαλὴ Ἀράμ, τοῦτ' ἔστιν ἡ Δαμασκός,²³⁾

(エフライムの王国は滅び、民ではなくなるであろう。あと65年でエフライムの、すなわちイスラエルの王国は滅びるであろう。アラムの頭、すなわちダマスコも滅びるであろう。)

よって Cyrillus は (16) の ἐκλείπειν を、ある物について「供給がなくなる」の意味ではなく、「滅びる、消え去る」の意味で捉えていることがわかる。

以上から、(13) の ἐκλείπειν は、Muraoka の言う「供給がなくなる」の意味ではなく、「滅びる、消え去る」の意味を表し、それが伴う ἀπό は、不足する物についてではなく、滅ぶ理由について用いられていると理解すべきである。

IV

S. Connolly は、III で示した Beda の注釈の中の問題箇所 “*Defecerunt ab esca oues*” を「羊は牧草ゆえにやせ衰えた」 (“*The sheep have pined away from the pasture*”) と訳すごとく、Beda がハバクク書3:17のこのくだりを引用する際、問題の *deficere* の意味を「滅びる、消え去る」ではなく、一貫して「やせ衰える」(*pine away*) と捉えている。²⁴⁾ 確かに *deficere* の原語の ἐκλείπειν は、*deficere* と同様に「衰弱する」の意味を持つ。例えば次の (17) でこの動詞は、(13) におけると同じく羊について用いられているが、「滅びる、消え去る」の意味でないことは明らかである。

(17) Τὸ ἀπολωλὸς ζητήσω καὶ τὸ πλανώμενον ἐπιστρέψω καὶ τὸ συντετριμμένον καταδήσω καὶ τὸ ἐκλείπον ἐνισχύσω καὶ ... (Ez. 34.16)²⁵⁾

(私は、いなくなったものを探し、迷うものを連れ戻し、打ち砕かれたものに包帯を施し、弱っているものを力づけ、……)

ならば (13) の ἐκλείπειν は、この「衰弱する」の意味で捉えるべきであろうか。

(13) において ἐκλείπειν に伴う ἀπό の目的語である βρωσις (食物) という語は、下の (18) に見られるごとく、牧草を指すのに用いられることがある。

(18) ... ὥστε καὶ ἐπὶ τὰ ἄλλα ἔτη τρία σπεῖραι καὶ ξυλαμῆσαι ὁμοίως τὸ μὲν ἥμισυ πυρῶν, τὸ δὲ ἄλλο ἥμισυ χλωροῖς, ἐπὶ δὲ τοῦ ἐσχάτου ἐνιαυτοῦ εἰς βρῶσιν προβάτων καὶ κοίτην, (*PLips.* 118.15 (ii A.D.))²⁶⁾

(……さらに3年間も同様に、[借地の] 半分には小麦の、もう半分には青菜の種をまき、最後の年には、羊の糧 [牧草] と囲いにする。)

実際、(13)の βρῶσις は、次の(19)では、(1)におけると異なり、「牧草」の意味を持つ²⁷⁾ *pabulum* に訳されている。

(19) ... Deficient a *pabulo* oues et non erunt in praesepeibus boues. (*ITALA Hab.* 3, 17 (*Cypr. Demetr.* 20))²⁸⁾

(……羊は牧草ゆえに減び、牛は畜舎にいないであろう。)

従って(13)の βρῶσις は、食物の中でも、とりわけ牧草を指していると考えられる。

ここで注目すべきは、牛と並んで羊が言及され、牧草がないために羊が死滅する (ἀφανίζεσθαι) という趣旨が述べられている箇所が、以下の(20)に引いたように、LXXのヨエル書1:18に見出されることである。

(20) ἐκλαυσαν βουκόλια βοῶν, ὅτι οὐχ ὑπήρχεν νομὴ αὐτοῖς, καὶ τὰ ποίμνια τῶν προβάτων ἠφανίσθησαν. (*Jl.* 1.18)

(牛の群れは悲しい声で鳴いた。それらに牧場がないからである。また羊の群れは絶滅した。)

文法的には、牧草の欠如を示す節は、先行する牛についての記述に従属しているが、Hieronymus (347/348~420) は、同箇所のラテン語訳である「牛の群れは悲しい声で鳴いた。それらに牧場がないからである」(“*Fleuerunt armenta boum, quoniam non sunt eis pascua*”) を引き、それについて

*compellit nos non de bobus et armentis accipere quae dicta sunt, sed de his, qui propter simplicitatem boues uocantur et oues.*²⁹⁾

(述べられていることを、牛や大型の家畜についてではなく、より単純に、牛や羊と呼ばれるものについて理解するよう強いている。)

と記述して、牧場がないことを、牛のみならず羊にも関連させている。またCyrillusは、以下の(20)の解釈で、ἀφανίζεσθαιを καταφθειρέσθαι (滅びる) に言い換えつつ、羊の絶滅を牧草の欠如と結び付けている。

Ὅτι δὲ, ... τοῖς τῶν καρπῶν ἡμέροις καὶ αὐταὶ συνδιολώλασιν αἱ τῆς ἐρήμου πόαι, καθίστησιν ἐναργές, ἠφανίσθαι λέγων καὶ αὐτὰ τῶν προβάτων τὰ ποίμνια, λιμῶ πάντως κατεφθαρμένα, καὶ τῆς συνήθους

καὶ φιλαιότης αὐτοῖς ἐστερημένα ζωῆς.³⁰⁾

(飢餓で完全に滅ぼされ、普段のお気に入りのおきの糧を奪われて、羊の群れまで絶滅した、と述べることにより、……栽培作物のみならず、荒野の草まで消滅したということを明らかにしている。)

このように、(13)の「食物」は牧草と見なされること、そして牧草がないゆえの羊の死滅が、牛への言及と並んで、述べられている箇所がLXXの他の箇所に見出されることから、(13)の ἐκλείπειν は「滅びる、消え去る」の意味で捉えることが可能である。

(13)の牛と羊については、Theodorus Mopsuestenus (428没)は、次のごとく προσάπολλυσθαι (滅びる)を用いて解釈している。

προσαπολέσσονται δὲ καὶ τὰ κτήνη πάντα, ἐρημία νομῆς τε καὶ βρωμάτων.³¹⁾

(家畜もすべて、牧場と食物を欠いて、絶滅するであろう。)

また Theodoretus Cyrensis (458没)も、(13)の牛と羊について、φθειρῆσθαι (滅びる)を用いて、以下の解釈を述べている。

Οὐκ ὄψομαι, . . . οὐ λιμῶ τὰ κτήνη φθειρόμενα.³²⁾

(私は、……飢餓により家畜が滅びるのを目にすることもないであろう。)

よってこれら2人は、(13)の ἐκλείπειν を「滅びる、消え去る」の意味で捉えていることがわかる。

さらに、以下において Gregorius Turonensis (593没)は、牧草の枯死に由来する疫病で家畜が大量死した災厄を、ハバクク書3:17の問題の部分になぞらえている。

Siccitas immensa fuit, quae omne pabulum herbarum avertit; unde factum est, ut gravis morbus in pecoribus ac iumentis invalescens parum, unde sumeretur origo, relinqueret, sicut Abbaac propheta vaticinatus est: *Deficient ab esca oves, et non erunt in praesepibus boves.*³³⁾

(非常に早魃があり、それが牧草を一掃した。その結果、家畜や役畜の間に重病が蔓延し、それは子種が取れるようなものをほとんど残さなかった。預言者ハバククが「羊は食物ゆえに滅び、牛は畜舎にいないであろう」と預言したとおりに。)

従って Gregorius は、問題の ἐκλείπειν の訳語の deficere を「滅びる、消え去る」の意味で捉えていると考えられる。

最後に、(13)の羊についての記述は、後続する牛についての記述と並行しているが、後者における「存在しない」(οὐχ ὑπάρχειν) という表現を用いた牛の不在の明言は、それと対をなす羊の絶滅——衰弱ではなく——を、明瞭に示すものである。

以上から、(13)の ἐκλείπειν を——Connolly がその訳語としての *deficere* を「やせ衰える」と訳すように——「衰弱する」の意味で解釈すべきではなく、「滅びる、消え去る」の意味で捉えるべきであると判断できる。

V

ここで、(13)におけると同様の使われ方をしている ἐκλείπειν の例を LXX の中から拾い出してみよう。³⁴⁾この動詞が、有生物を主語として、「…から、…ゆえ」の意味の前置詞 (ἀπό ないし ἐκ) を伴うケースは、(13)を除き、以下の(21)~(30)の合計10例が見出される。

そのうち次の(21)~(28)では、ἐκλείπειν に伴う前置詞は、いずれも場所について用いられている。

(21) οὐκ ἐκλείψει ἄρχων ἐξ Ιουδα καὶ ἡγούμενος ἐκ τῶν μηρῶν αὐτοῦ, (*Ge.* 49.10)

(支配者はユダから、指導者は彼の腰から、絶えることはないであろう。)

(22) οὐ γὰρ μὴ ἐκλίπη ἐνδειῆς ἀπὸ τῆς γῆς' (*De.* 15.11)³⁵⁾

(貧しい者が地から絶えることは決してないからである。)

(23) οὐ μὴ ἐκλίπη ἐξ ὑμῶν δοῦλος οὐδὲ ξυλοκόπος ἐμοὶ καὶ τῷ θεῷ μου. (*Jo.* 9.23)

(お前たちから、私と私の神のために、奴隷も木を切る者も、決して絶えることはない。)

(24) καὶ χαρήσονται οἱ ἀγαπῶντες τὸν θεὸν ἐπ' ἀληθείας, καὶ οἱ ποιοῦντες τὴν ἁμαρτίαν καὶ τὴν ἀδικίαν ἐκλείψουσιν ἀπὸ πάσης τῆς γῆς. (*To.* 14.7 (S))

(まことに神を愛する者たちは喜び、罪と不正をなす者たちは全地から滅びるのであろう。)

(25) ἐκλίποισαν ἁμαρτωλοὶ ἀπὸ τῆς γῆς καὶ ἄνομοι ὥστε μὴ ὑπάρχειν αὐτούς. (*Ps.* 103(104).35)

(罪人たちは地から絶え、不法の者たちはいなくなるように。)

- (26) *Ἐκλείψει ἐκλίπτω πάντα ἀπὸ προσώπου τῆς γῆς, λέγει κύριος, (Ze. 1.2)³⁶⁾*

(地上からすべてのものが完全に滅びることになる、と主は言う。)

- (27) *καὶ ἀποστελῶ εἰς αὐτοὺς τὸν λιμὸν καὶ τὸν θάνατον καὶ τὴν μάχαιραν, ἕως ἂν ἐκλίπωσιν ἀπὸ τῆς γῆς, ἧς ἔδωκα αὐτοῖς. (Je. 24.10)*

(彼らが、彼らに与えた地から絶えるまで、私は彼らに対して飢餓と死と剣を送るであろう)

- (28) *Εἰσπορευόμενος εἰσπορεύεται ὁ βασιλεὺς Βαβυλῶνος καὶ ἐξολεθρεύσει τὴν γῆν ταύτην, καὶ ἐκλείψει ἀπ' αὐτῆς ἄνθρωπος καὶ κτήνη (Je. 43(36).29)*

(バビロンの王が必ず来て、この地を滅ぼし、ここから人と家畜が絶えるであろう。)

これら8例において *ἐκλείπειν* は、前置詞句により消滅する地点が明示されているため、「滅びる、消え去る」の意味以外では捉えられない。

一方、次の(29)(30)において、*ἐκλείπειν* に伴う前置詞は、(13) におけると同様、理由・原因について用いられている。

- (29) *ἀπόστησον ἀπ' ἐμοῦ τὰς μάστιγάς σου ἀπὸ τῆς ἰσχύος τῆς χειρὸς σου ἐγὼ ἐξέλιπον. (Ps. 38(39).11)*

(あなたの鞭打ちを私から離し給え。あなたの手の力により私は衰えました。)

- (30) *οὔτε ἐπέινασαν οὔτε ἐκοπίασαν καὶ οὐκ ἐξέλιπον ἀπὸ τῶν ἔργων αὐτῶν. (Si. 16.27)³⁷⁾*

([主が造ったものは] 飢えることも、苦しむこともなく、仕事により衰弱することもなかった。)

これら2例において *ἐκλείπειν* は、「滅びる、消え去る」の意味ではなく、「衰弱する」の意味で捉えられる。

以上の事実から、問題の(13)について指摘できるのは次の点である——並行関係にある牛についての記述では牛が存在しないことが明確に示されているにもかかわらず、羊についての記述では、*ἐκλείπειν* が場所についてではなく理由について用いられた *ἀπὸ* を伴い、確実に「存在しなくなる」の意味を表す形で用いられていないため、明確には羊の絶滅が表現されていないという並行体の乱れが認められる。

では、どのような背景で (13) の *ἐκλείπειν* は、文脈的には「滅びる、消え去る」の意味を表すと考えられるにもかかわらず、このように、形の上では——*ἀπό* が位置的にはなく、理由について用いられて——明確にはその意味を表さないという用法を示すに至ったのであろうか。

ここで見過ごせないのは、(13) の *ἀπό* が支配する *βρώσις* (食物) が、ヘブライ語原典³⁸⁾の「家畜の囲い」³⁹⁾を意味する *מַכְלָא* に対応している事実である。つまり LXX の翻訳者たちは、このヘブライ語の意味を捉え損ねて「食物」と誤訳したということである。⁴⁰⁾

その一方で、F. Field によるテキスト (*Origenis Hexaplorum quae supersunt*) には、(13) に対応する以下の異文が見られる。ここでは、*βρώσις* の代わりに、「動物の囲い」⁴¹⁾を意味する *μάνδρα* が適切に用いられている。⁴²⁾

(31) ... ἐκλείπει ἐκ μάνδρας πρόβατα, καὶ βόες οὐχ ὑπάρξουσιν ἐπὶ φάτναις. (Al. Hb. 3.17)⁴³⁾

(……羊は囲いから消え、牛は飼葉槽の傍らにいないであろう。)

(31) においては、*ἐκλείπειν* が、*ἐκ* の後ろに消滅する地点を伴うという、確実に「滅びる、消え去る」の意味を表す形で用いられているため、(13) におけるのと異なり、牛の不在と釣り合うように、明確に羊の絶滅が表現されている。

VI

前章では、LXX において *ἐκλείπειν* が *ἀπό* または *ἐκ* を伴う例を列挙したが、その (21)~(30) のうち *ἐκλείπειν* が *deficere* により訳されているケースを以下に挙げてみよう。

まず (21)~(28) のうち (21) と (24)~(28) における *ἀπό* または *ἐκ* を伴う *ἐκλείπειν* は、以下の (32)~(37) に見られるごとく、*ex*、*de* または *ab* を伴う *deficere* へと訳されている。⁴⁴⁾

(32) *Non deficiet princeps ex Iuda, ...* (ITALA gen. 49, 10 (Lugd.))⁴⁵⁾

(支配者はユダから、……絶えることはないであろう。)

(33) ... *qui autem faciunt iniquitatem & peccatum, deficient de terris omnibus* (ITALA Tob. 14, 9 (Reg. Germ. 4))⁴⁶⁾

(……罪と不正をなす者たちは全地から滅びるであろう。)

- (34) *deficient peccatores a terra et iniqui ita ut non sint* (Ps 103:35)
(罪人たちは地から絶え、不法の者たちはいなくなるように。)
- (35) *Defectione deficiat a facie terrae, . . .* (ITALA Soph. 1, 2 (Cypr. testim. 3, 47))⁴⁷⁾
(地上から完全に滅びることになる、……)
- (36) . . . *donec deficiant a terra quam dedi eis.* (ITALA Ier. 24, 10 (Ps. Cypr. pasch. 11))⁴⁸⁾
(彼らが、私が彼らに与えた地から絶えるまで、……)
- (37) . . . *et deficiet ab ea homo et pecora* (ITALA Ier. 36 (43), 29 (Wirc.))⁴⁹⁾
(……ここから人と家畜が絶えるであろう。)

これらにおいては、ギリシャ語原文におけると同様、前置詞句により消え去る地点が示されており、*deficere* は明確に「滅びる、消え去る」の意味で捉えられる。なお、この *deficere* の用法は、次の (38) におけるごとく、ギリシャ語原文で ἐκλείπειν が用いられていない箇所にも見出される。

- (38) *Expugnauerunt illos, et defecit uir Israel a conspectu alienigenarum, et fugit unusquisque in tabernaculum suum.* (ITALA I reg. 4, 10 (Lucif. Athan. 1, 11))⁵⁰⁾

(〔ペリシテ人は〕彼らと戦い、イスラエル人は外国人たちの視界から消え、おのおの自分の天幕へと逃げ去った。)

次に、(29)(30)のうち、(29)の ἐκλείπειν ἀπόが、下の(39)におけるように、*deficere ab* へと訳されている。⁵¹⁾

- (39) . . . *a fortitudine enim manus tuae ego defeci in increpationibus* (PsRom 38:11)

(……あなたの手の力により、叱責のうちに、私は衰えました。)

ここでは、ギリシャ語原文におけると同じく、*ab* に導かれる前置詞句は理由を表し、*deficere* は「滅びる、消え去る」ではなく「衰弱する」の意味で捉えられる。

さらに、(34)では場所について用いられた *ab* を、(39)では理由について用いられた *ab* を伴う *deficere* は、以下の(40)(41)に見られるように、古英語の行間注解において、それぞれ場所、理由を表す *fram* を伴い、前者では「滅びる、消え去る」、後者では「衰弱する」の意味を持つ *geteorian* により訳されている。

- (40) *geteorien synfulle fram eorðan . . .* (PsGID 103.35)

(41) . . . *fram strengo soplice hande þinre ic geteorode . . .* (PsGID 38.12)

従って、(1)(2)については、Vで(13)について指摘したのと同様の、以下の点を指摘することができる——並行する牛についてのくんだりでは、牛が存在しないことが明確に——「残っていない」(*non superesse*)、「いない」(*na beon*)という表現で——示されているのに対して、羊についてのくんだりでは、*deficere*、*geteorian*が、地点ではなく理由を表す *ab*、*fram* をそれぞれ伴っており、「滅びる、消え去る」の意味を確実に示す形で用いられていないため、羊の死滅が明確には表現されていないという不釣合いが看取される。

LXX のハバクク書3:17では、*ἐκλείπτειν* に伴う *ἀπό* が、誤訳により、場所ではなく理由を導くために——「困いから」とされるべきところを「食物ゆえに」と訳されたために——、この誤訳は古ラテン語訳で *deficere* に伴う *ab* へ、さらに古英語の行間注解 (PsCaD) で *geteorian* に伴う *fram* へと順次直訳されて受け継がれた。その結果、並行する牛についての記述では牛の不在が明確に表されている一方で、羊についての記述では、*ἐκλείπτειν* が「滅びる、消え去る」の意味を確実に表す形が採用されておらず、羊の消滅が明確には表現されていないという、ギリシャ語原文における不均衡が、古ラテン語訳の、ひいては古英語の注解の対応箇所にまで継承されていると指摘できる。

注

- 1) 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、A. Cameron et al., *Dictionary of Old English: A to G on CD-ROM* (Toronto, 2008) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *TLL (Thesaurus Linguae Latinae)* (Leipzig, 1900-) に従う。なお、頭に括弧付の番号を振った、古英語、ラテン語およびギリシャ語の引用文中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。
- 2) B. Dombart et A. Kalb, *Sancti Aurelii Augustini De Civitate Dei*, CCSL 47, 48 (Turnholti, 1955), p. 626. (1) は *TLL*, s.v. *deficio* II A1d [vol. 5, pt. 1, p. 329, 32ff.] の「命を失くす、*mori* (死ぬ)、*perire* (滅びる) と同じ」(“*vita -ere i.q. mori, perire*”)のもと、「動物について」(“*de bestiis*”)用いられた例として挙げられている (p. 330, 9)。
- 3) F. Roeder, *Der altenglische Regius-Psalter*, Studien zur englischen Philologie 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973). ただし (2) のラテン語原文と (1) とで

- は、(1)の“supersunt”と“praesepibus”が、それぞれ(2)では“erunt”と“praesepio”となっているという異同がある。なお、以下、本稿において PsGID と記された引用は、同書からのものである。
- 4) F. G. Cassidy and R. N. Ringler, *Bright's Old English Grammar and Reader*, 3rd ed. (New York, 1971), p. 215. (3) は T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement* (Oxford, 1921), s.v. *geteorian* I の「(人について) 疲れ果てる」(“of persons, to be exhausted, be fatigued”) に挙げられている例である。
 - 5) H. R. Fairclough, *Virgil: Eclogues, Georgics, . . .* rev. by G. P. Goold, LCL (Loeb Classical Library) 63 (1999), p. 182. (4) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *deficio* 5 の「力を失う、弱る、衰える」(“To lose strength, weaken, fail, fade”) に挙げられている例である。
 - 6) S. J. Crawford, *The Old English Version of the Heptateuch*, EETS 160 (1922; repr. London, 1969).
 - 7) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007).
 - 8) J. C. Rolfe, *Suetonius*, vol. 2, rev., LCL 38 (1997), p. 180. (6) は *OLD*, s.v. *deficio* 6b の「(種族等について) 絶滅する、死に絶える」(“(of a race, or sim.) to become extinct, die out”) に挙げられている例である。
 - 9) G. P. Krapp, *The Paris Psalter and the Meters of Boethius*, ASPR 5 (New York, 1932), p. 78.
 - 10) R. Weber, *Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, Collectanea Biblica Latina 10 (Roma, 1953).
 - 11) B. O. Foster, *Livy: History of Rome, Books V–VII*, LCL 172 (1924), pp. 446–48. (9) は、*OLD*, s.v. *deficio* 3 の「欠けている、不足する、尽きる」(“To be lacking, run short, fail”) に挙げられている例である。
 - 12) *The Gospel according to Saint Luke and according to Saint John* (Cambridge, 1874, 1878; Nachdr. Darmstadt, 1970). (10) は Toller, s.v. *geteorian* II の「(物について) 使い果たす、なくなる」(“of things, to be used up, come to an end, fail”) の意味の例として、ラテン語原文と共に挙げられている。
 - 13) H. Rackham, *Cicero: De Natura Deorum, . . .* rev., LCL 268 (1951), p. 102. (11) と後続の(12)は、*TLL*, s.v. *deficio* IIA2c [p. 334, 31ff.] の「減少する時間ないしは場所について……『終わる』と同じ(反意語『持ちこたえる』)」(“de minuendo tempore vel loco . . . i.q. desinere, finem habere (opp. perseverare)”) において、「非物質的な物」(“res incorporeae”) に用いられた例として挙げられている (p. 334, 32, 45)。
 - 14) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). ギリシャ語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English*

- Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996) による。
- 15) (14) は Muraoka, s.v. ἐκλείπω II.1 の「存在しなくなる」(“*to cease to exist*”) に挙げられている例である。
- 16) T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009), s.v. ἐκλείπω II.4.
- 17) 以下生没年は、ギリシャ語での著述家については G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon* (Oxford, 1961)、ラテン語での著述家については R. Gryson, *Répertoire Général des Auteurs Ecclésiastiques Latins de l'Antiquité et du Haut Moyen Âge*, 2 vol. (Freiburg, 2007) による。
- 18) J.-P. Migne, “Commentarius in Habacuc Prophetam,” *S. P. N. Cyrilli Alexandriae Archiepiscopi Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, PG (Patrologia Graeca) 71 (Paris, 1859; repr. Turnhout, 1989), col. 941B.
- 19) J. E. Hudson, “In Habacuc,” *Bedaе Venerabilis Opera*, pars 2, 2B, CCSL 119B (Turnholti, 1983), pp. 406–07. S. Connolly (*Bede: On Tobit and on the Canticle of Habakkuk* (Dublin, 1997), p. 93n171) は、この Beda の解釈について以下のように述べて、彼の注釈が適切であるとしつつも、このラテン語訳そのものがギリシャ語原文に引きずられた不自然なものであることを認めている——「ギリシャ語原文にあるのは、*ab* の同族語であるばかりでなく、同じ『…から』という基本的意味を持つ、前置詞 ἀπό である。さらにそれは、*from* 同様、所与の文脈において『…のために、…の結果』の意味も持ち得る。完全に、つまり略さずに翻訳すれば、この前置詞はここで、Beda が正しく述べているごとく、『…がないために』を意味するであろう。……翻訳者たちは、古代では、また比較的最近に至るまでも、聖書原文への敬意から奴隸的直訳をするのをやむを得ないと感じていた。……結果的に注釈者たちは、ここで著者 [Beda] がしているごとく、しばしば翻訳の説明をしなければならないと気づいた」(“The Greek has the preposition ἀπό which is not only a cognate of *ab* but has the same basic meaning ‘from’. Moreover like our ‘from’ it can in a given context also mean ‘because of/as a result of/on account of’. Translated in full, i.e. unelliptically, the preposition would here mean ‘for/because of the/ lack of’, as Bede rightly observes. . . . translators in antiquity and even until relatively recent times felt obliged out of reverence for the sacred text to give a slavishly literal rendering. . . . As a consequence exegetes often found it necessary to elucidate the translation, as our author does here”).
- 20) R. Demeulenaere, “Commentarii super Cantica Ecclesiastica,” *Verecundi Iuncensis Opera*, CCSL 93 (Turnholti, 1976), p. 146.
- 21) E. Oder, *Claudii Hermeri Mulomedicina Chironis* (Lipsiae, 1901). (15) は *TLL*, s.v. *deficio* IIA1d において、前置詞 *ab* を伴う例として挙げられている (p.

- 330, 26)。
- 22) その一方で Muraoka (s.v. ἄπό 11) は (16) を、「ἄπό により支配された名詞は、節の主語を表したり、その中の直接目的語により示されたりする実体との間に、もはや等しい関係が当てはまらないような実体を表す場合がある」(“The noun governed by ἄπό may refer to an entity between which and the entity marking the subject of the clause or indicated by a direct object in it the relationship of equation is no longer applicable”) という ἄπό の用法の一例として挙げており、つまりこの ἄπό を「…ではなくなつて」の意味で捉えている。イザヤ書7:8 のヘブライ語原文 **וְהָיָה אֶפְרַיִם מְצַד**... は、*Gesenius' Hebrew Grammar* (ed. E. Kautzsch, rev. by A. E. Cowley (Oxford, 1910), § 119y) において、**מִן** (…から) の用法に関連して「エフライムは粉々になり、民ではなくなるであろう」(“*Ephraim shall be broken in pieces מְצַד that it be not a people*”) と解釈されているごとく、あえて直訳すれば「……エフライムは民 [である状態] から粉々になるであろう」であり、またウルガータにおいてもこの箇所は「……エフライムは民ではなくなるであろう」(“... et desinet Ephraim esse populus”) と訳されている。従つて、Muraoka のこの ἄπό の項における (16) の解釈は妥当である。
- 23) J.-P. Migne, “Commentarium in Isaiam Prophetam,” *S. P. N. Cyrilli Alexandriae Archiepiscopi Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, PG 70 (Paris, 1859; repr. Turnhout, 1987), col. 200B.
- 24) Connolly, pp. 91–93.
- 25) (17) は Muraoka, s.v. ἐκλείπτω II.3 の「力・効能を失う、正常に機能しなくなる」(“*to lose strength or efficacy, fail to function properly*”) に挙げられている例である。
- 26) L. Mitteis, *Griechische Urkunden der Papyrussammlung zu Leipzig*, 1. Bd. (Leipzig, 1906), p. 323. (18) は Liddell and Scott, s.v. βεῶσις I.2 の「牧草」(“*pasture*”) に挙げられている例である。
- 27) 例えば *OLD*, s.v. *pabulum* 1b の「牧草」(“*growing fodder, pasture*”) に挙げられている次の例を参照——*PLIN. nat.* 17, 26: *nec luxuriosa pabula pinguis soli semper indicium habent* (H. Rackham, *Pliny: Natural History, Books 17–19*, LCL 371 (1950), p. 18) (また繁茂した牧草が、必ずしも肥えた土壌を示すわけではない)。
- 28) M. Simonetti, “Ad Demetrianum,” *Sancti Cypriani Episcopi Opera*, CCSL 3A (Turnholti, 1976), p. 46. (19) は *TLL*, s.v. *deficio* IIA1d に、(1) と並んで挙げられている (p. 330, 8)。
- 29) M. Adriaen, “Commentarii in Prophetas Minores,” *S. Hieronymi Presbyteri Opera*, pars 1, 6, CCSL 76 (Turnholti, 1969), p. 174.

- 30) J.-P. Migne, “Commentarius in Joelem Prophetam,” PG 71, col. 352D–53A.
- 31) J.-P. Migne, “Commentarius in XII Prophetas Minores,” *Theodori Mopsuesteni Episcopi . . . Scripta vel Scriptorum Fragmenta Quae Supersunt*, PG 66 (Paris, 1859; repr. Turnhout, 1986), col. 448C.
- 32) J.-P. Migne, “Explanatio in XII Prophetas Minores,” *Theodoretii Cyrensis Episcopi Opera Omnia*, PG 81 (Paris, 1860; repr. Turnhout, 1984), col. 1833C.
- 33) B. Krusch et W. Levison, *Gregorii Episcopi Turonensis Libri Historiarum X*, MGH, SRM 1, pars 1, ed. altera (Hannoverae, 1951), p. 525.
- 34) LXX の語句の検索には E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998) を使用した。
- 35) (22) および後出の (28) は Muraoka, s.v. ἐκλείπω II.2 の「(ある者から) 別れる、消える」(“*to take leave of, become non-existent for sbd* (ἐκ/ἀπό)”) に例として挙げられている。
- 36) (26) は Muraoka, s.v. ἐκλείπω の前記 II.1 の「存在しなくなる」に例として挙げられている。
- 37) Muraoka (s.v. ἐκλείπω I.1) は、この ἐκλείπειν の例を、「自らの仕事を何一つ (怠らなかつた)」(“*none of their tasks*”) と解釈して「やめる、放棄する、怠る」(“*to abandon, desert, neglect*”) という他動詞の意味で挙げつつ、「…の重圧で気を失った」(“*passed out under the weight of . . .*”) とともに解釈して前記 II.3 の「力・効力を失う、……」の意味でも挙げられる可能性を示している。
- 38) K. Elliger et W. Rudolph, *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, ed. quinta (1997).
- 39) L. Koehler und W. Baumgartner, *Hebräisches und aramäisches Lexikon zum Alten Testament*, 3. Aufl. (Leiden, 1967–96), s.v. מְכֻלָּה: Hürde.
- 40) J. F. Schleusner (*Novus Thesaurus Philologico-Criticus: sive, Lexicon in LXX*, ed. altera, 3 vol. (Glasgae, 1822), s.v. βρωσικς) は、列王記上 5:11(25) において מאכלה (食物) が מכלה の形で現れていることを引き合いに出し、翻訳者たちがハバクク書 3:17 の מכלה を מאכלה (その食物) と捉えたと指摘する。また、J. Lust et al. (*A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, rev. ed. (Stuttgart, 2003), s.v. βρωσικς) も、(13) の「食物ゆえに、牧草ゆえに」(“*from the food, from the pasture*”) の意味の ἀπὸ βρωσικς εως は、マソラ本文 (Masoretic text) の מְכֻלָּה/מְכֻלָּה 「囲いから」(“*from the fold*”) を、מְכֻלָּה/מְכֻלָּה と読んだものであるとする。
- 41) Muraoka, s.v. μάνδρα: *enclosed space for animals*, ‘pen, fold.’
- 42) ウルガータにおいても問題の מכלה は適切に「羊の囲い」(“*A pen for sheep, sheepfold*”) (*OLD*, s.v. ouile 1) と訳されている——Hab 3:17: . . . abscidetur de ovili pecus et non erit armentum in praesepibus (……羊は囲いから切り離され、牛は畜舎にいないであろう)。
- 43) F. Field, *Origenis Hexaplorum quae supersunt sive veterum interpretum*

- graecorum in totum vetus testamentum fragmenta*, 2 tom. (Oxford, 1875; Nachdr. Hildesheim, 1964), t. 2, p. 1011. (31) におけるように、μάνδρα と φάτνη が並行して用いられるケースは LXX では以下にも見られる——2 Ch. 32.28: καὶ πόλεις εἰς τὰ γενήματα σίτου καὶ ἐλαίου καὶ οἴνου καὶ φάτνας παντός κτήνους καὶ μάνδρας εἰς τὰ ποιμνία (実った穀物、油と葡萄酒のための町、あらゆる家畜のための畜舎と羊の群れのための囲いを [彼は造った])。従って (31) における μάνδρα の使用はこの点でも安定したものであると言える。なお、Muraoka (s.v. φάτνη) は、上記2 Ch. 32.28において φάτνη が μάνδρα と並行して用いられていることを示して、φάτνη がそこでは「畜舎」(“stall”) の意味であるとし、一方 (13) の φάτνη は「飼い葉槽」(“manger”) の意味で取っている。筆者も Muraoka のこの解釈に従う。
- 44) (22)(23) の ἐκλείπειν はともに desum (欠ける) により表されている——ITALA deut. 15, 11 (Lugd.): Non enim deerit egens a terra (U. Robert, *Heptateuchi Partis Posterioris Versio Latina Antiquissima e Codice Lugdunensi* (Lyon, 1900), p. 10) (貧しい者が地から欠けることはないであろうからである)、ITALA Ios. 9, 23 (Lugd.): nec omnino deerit ex uobis seruus . . . (p. 70) (お前たちから……奴隷も……決して欠けることはないであろう)。
- 45) U. Robert, *Pentateuchi Versio Latina Antiquissima e Codice Lugdunensi* (Paris, 1881), p. 162.
- 46) P. Sabatier, *Bibliorum Sacrorum Latinae Versiones Antiquae*, 3 tom. (Remis, 1743; repr. Turnhout, 1976), tom. 1, p. 742.
- 47) R. Weber, “Ad Quirinum,” *Sancti Cypriani Episcopi Opera*, CCSL 3 (Turnholti, 1972), p. 137.
- 48) G. Hartel, “De Pascha Computus,” *S. Thasci Caecili Cypriani Opera Omnia*, CSEL 3, pars 3 (Vindobonae, 1871), p. 259.
- 49) E. Ranke, *Par Palimpsestorum Wirceburgensium* (Vindobonae, 1871), p. 309.
- 50) G. F. Diercks, “Quia absentem nemo debet iudicare nec damnare siue de Athanasio,” *Luciferi Calaritani Opera Quae Supersunt*, CCSL 8 (Turnholti, 1978), p. 21. (38) は TLL, s.v. deficio II A1d に挙げられている例である (p. 329, 56)。TLL が指摘するように、この deficere は LXX の 1 Ki. 4.10: . . . καὶ πταίει ἀνήρ Ἰσραηλ, καὶ ἔφυγεν ἕκαστος εἰς σκῆνωμα αὐτοῦ (……イスラエル人は倒れ、おのおの自分の天幕へと逃げ去った) の πταίειν (倒れる) に対応している。なお前出の (34)(36) は、TLL において (38) の後ろに参照 (cf.) されている例である。
- 51) (30) の ἐκλείπειν は desistere (中止する) により表されている——Sir 16:27: . . . et non destiterunt ab operibus suis ([主が造ったものは] ……仕事をやめることもなかった)。

On Old English *geteorian* and Latin *deficere*

Satoru ISHIHARA

The Latin *deficere* “to fail” in *Defecerunt ab esca oues. et non erunt in presepio boues* (Hab [vet.lat.] 3:17) “the sheep have failed from the food, and there will be no cattle in the stall” is rendered in the Old English interlinear gloss by *geteorian* “to fail”: *geteorodon fram mete sceap & na beoð on binne oxan* (PsCaD 6(5).16).

The *deficere* is derived from the ἐκλείπειν “to fail” in ἐξέλιπον ἀπὸ βρώσεως πρόβατα, καὶ οὐχ ὑπάρχουσιν βόες ἐπὶ φάτναις (LXX *Hb.* 3.17) “the sheep have failed from the food, and there are no cattle at the mangers”; here the parallel statement about the non-existence of the cattle enables us to regard the ἐκλείπειν as used in the sense “to die out.” It is followed by the preposition ἀπὸ used, through a mistranslation, in the causal sense “from, because of,” not in the local sense “from (a place).” When ἐκλείπειν is followed by ἀπὸ used in the local sense, it is undeniably to be interpreted as “to die out,” e.g.: ἐκλίποισαν ἁμαρτωλοὶ ἀπὸ τῆς γῆς (*Ps.* 103(104).35) “let sinners fail from the earth.” But when it is followed by ἀπὸ used in the causal sense, as in Hab. 3:17, ἐκλείπειν can be grasped in the sense “to weaken,” e.g.: ἀπὸ τῆς ἰσχύος τῆς χειρὸς σου ἐγὼ ἐξέλιπον (*Ps.* 38(39).11) “from the strength of thine hand I have failed.” Concerning the parallelism in Hab. 3:17 in the Greek we can say, therefore, that the extinction of the sheep is not explicitly stated, whereas the non-existence of the cattle is.

The use of *deficere* and *geteorian* followed by *ab* or *fram* used in the local sense is exemplified respectively in: *deficient peccatores a terra* (*Ps* 103:35) “let sinners fail from the earth” and *geteorien synfulle fram eorðan* (*PsGID* 103.35), where the sense “to die out” is unmistakably expressed by these verbs. On the other hand, the sense of dying out is not definitely conveyed by the *deficere* in Hab. 3:17 in the Old Latin version, nor by the *geteorian* as its gloss; they are followed respectively by *ab* and *fram* used in the causal sense. Thus we can conclude that the imbalance of parallelism found in Hab. 3:17 in the Septuagint is also found in the corresponding places in the Old Latin Bible and in the Old English gloss.